支援と受援①

思い出探し隊　一枚でも多く住民たちのもとへ

▲作業テントの中で洗浄した写真を乾燥させる。

『まさか何もかも流されてしまうなんて』　住民の半数以上が家や家財を失い、着の身着のままになってしまうことを誰が想像していただろうか。

それぞれの宝物や思い出の写真も、幼い頃から慣れ親しんだ風景さえも、一瞬にして消えてしまい、津波で亡くした家族の面影を偲ぶことさえできなかった。

2011（平成 23）年３月末、瓦礫の中から写真や日記、名前が入った文房具やグローブ、位牌などを集め歩くボランティア活動が始まった。その活動は「思い出探し隊」と名付けられ、メンバーは当初７人だった。大分県から知人の安否を確かめようとやって来たスーパーボランティアで知られる尾畠春夫さんは、町の惨状を目の当たりにして、テントに宿泊しながらこの活動に参加した。やがて、行方不明者を捜索する自衛隊や消防、警察なども瓦礫の中にアルバムや写真を見つけると、道路端にそれらを大切にまとめて置いてくれるようになった。全国から南三陸町に集まったボランティアが、日々、回収や写真洗浄を続けてくれた。

▲家族や知り合いの写真はないか、
食い入るように写真を見つめる住民ら

同年５月末、それらを入谷地区の廃校に展示して、住民たちへの返還が開始された。救出した写真は 10 万枚、アルバムは２千冊に上る。会場にやって来た住民たちは、思い出の写真を一心に探し続けた。

写真提供　南三陸町社会福祉協議会